

感情労働

2024・10・9 重枝 一郎

私たちの教育活動において、生徒自身もっている「強み」を、生徒自身に自覚させることがある。これは、生徒の自己存在価値（大切なひとり）をもたせることになる。私たちはこのことを、本校の最上位の目標と捉え、「大切なひとり」というシンボルワードで発信している。

実際の生徒の中には、「私はあの子のようにリーダーシップは取れない」等、自己評価があまり高くない生徒もいる。いわゆる自己肯定感が低いという生徒である。日本はその割合が多いとも言う。本校はどうだろう？ 生徒各々には、強みや個性があり、いろいろな役割を担うことができる。私たちの教育活動は、あくまでそうした資質などを育成する手段であって、生徒たちが社会に出たときに活躍できる人にするのが目的になる。

私たち教師の強みは、学校生活の中で生徒の様子を見て、適切なアプローチができるということである。この適切なアプローチの1つに「感情労働」がある。

私たちは、生徒の前で笑顔を見せたり、注意するために怒ってみせたり、一緒に悲しんだりすることがある。「感情労働」とは、仕事をする上で、感情のコントロールや表現が必要な労働のことである。

教師は、人の役に立つ、人を笑顔にするといった仕事なのでやりがいがある。しかし、相手の感情に合わせて、自分の感情をコントロールして対応しなければならない。教師に限らず、看護師、カウンセラーなど、人を相手にする職業には、「感情労働」が含まれている。「感情労働」は、感情を交流し、結びつきを深くする。心理的な距離が縮まりやすい。

私ももちろん「感情労働」をする。教師だから当然である。自分の本当の感情とのギャップはある。これも当たり前である。それによって、多少のストレスもかかる。しかし、「感情労働」はすべきことであって、ストレスも相手の笑顔で解消されることが多い。では、「感情労働」をしていない教師とは？ 自分の美学？ コミュニケーション能力が低い？ 私の感覚では、「感情労働」をする人は、普通のコミュニケーション能力の持ち主だが、その先の、相手との距離をグッと縮めることができる高度なコミュニケーション能力を持つ可能性を秘めていると思う。

私たち教師は、生徒の様々な心身の状況を受け止めて、人間的な成長を促していかなくてはならない。それが教師のリーダーシップである。このリーダーシップの1つに「感情労働」が含まれる。ちなみに、不機嫌は「感情労働」ではない。なつかしいフレーズをおぼえているか。「常に機嫌よく」（2022年4月 Sence of Mission・2021年月報）。

次のページを必ず読む

【9月30日・幼稚園保護者に対する校長講演のアンケートより】

(アンケート結果は、広報部の先生方にしか回覧しないようなので・・・)

・・・(略) 学校見学では、充実した施設を案内していただき、「いつか娘もここで」と期待が膨らみました。何よりも印象に残ったのは、職員室を通った時の先生方のあたたかい視線でした。先生方が、同じマインドやビジョンをもって、生徒さんたちを育てていらっしゃる事が伝わってきました。機会がありましたら次は娘と見学させていただきたいです。

これからも、先生方、よろしくお願いします